

吻合部付近の狭窄により再循環を認めた症例

秀佑会 腎クリニック高野台<sup>1)</sup> 東海病院<sup>2)</sup>

○高見僚 (タカミアキラ)<sup>1)</sup> 永見留里子<sup>1)</sup> 清水綾子<sup>1)</sup> 平石真弓<sup>1)</sup> 湊利男<sup>1)</sup> 永田雅子<sup>1)</sup>  
代田信夫<sup>2)</sup> 栗山謙<sup>2)</sup> 江本秀斗<sup>2)</sup>

#### 【背景】

透析療法において、バスキュラーアクセス（以下 VA）を長期間良好な状態で使用し続けることは重要である。しかし、VA への日々の穿刺によりアクセストラブルが起こることは容易に考えられる。今回、吻合部付近の狭窄により再循環を認めた症例を報告する。

#### 【症例】

吻合部付近に狭窄音が診られるが、脱血側（以下 A 側）穿刺部と返血側（以下 V 側）穿刺部が 10cm 以上の距離があり、透析中もピローがほぼ膨らんでいる状態であるため透析可能と思われていたが、透析モニターHD-02により測定したところ再循環が認められた。

#### 【考察】

造影、PTA を施行したところ、吻合部付近に強度の狭窄が見つかったため、血流不足により再循環が起きていたと考える。

#### 【結語】

吻合部付近の狭窄では、透析中ピローが膨らみ、脱血が良好と考えられる場合でも、実際には再循環が起っている可能性がある。